

林政ジャーナル

No. 2

1989年10月20日

発行所

日本林政ジャーナリストの会
〒100 東京都千代田区永田町2-4-3
電話 03-587-1210

群馬、栃木の森林・林業をみる 林政ジャ・ことしの共同取材

林政ジャーナリストの会の平成元年度の共同取材は8月24～25の両日行われた。東京に接した北関東の森林・林業をこの目で見ようというのがねらい。

24日午前9時52分上野駅発上越新幹線とき453号で出発、上毛高原駅下車、すぐ玉原森林文化の森に行く。ここでは主として森林の空間総合利用をめざすヒューマン・グリーン・プランの実態を見た。沼田市と玉原東急リゾートとの第三セクターによるスキー場は、環境保護の人達との意見調整で極力木を切らずに残すようにしたとのこと。

利根村の吹割の滝を見て、雷雨の中を国道120号、金精道路を走り、宿泊地の宇都宮営林署の「日光治山事業所宿泊所」へ急ぐ。当夜は着任早々の杉原昌樹・前橋営林局長がこられ、大いに議論をたたかわせ、お酒もかなり飲んだ。

翌25日は早朝8時、宿舎を出発、矢板市の「山県農場」を視察する。農場主の山県睦子さん（日本林業経営者協会婦人部会長）が栃木県庁の会合を途中退席して我々を迎え、100年を越すスギの美林や、見事な複層林、県産のアカマツを使ったベッド製作工場等を案内していただいた。

山県さんは大きな一本のスギを指さし、「この木は100年たって15万円、とてももうかるものではありません」といわれ、日本林業の難しさを身にしみて感じた。

一行は矢板市のハウライ牧場で昼食を取り、午後1時49分那須塩原駅発東北新幹線あおば212号で東京へ。

あわただしい日程であったが、宇都宮営林局、沼田営林署、宇都宮営林署の御協力で能率よく取材することができ、森林総合利用の問題点、長伐期に向かう民間林業の実態に触れることができた。

参加の会員は次の通りで、全部で14人。

増田俊二（東京新聞）、大谷健（朝日新聞）、二村寛寿（林業経済新聞）、阿部秀男（全国林業改良普及協会）、石井健雄（日本緑化センター）、内田啓明（共同通信社友）、武石光二（富士通）、辻潔（日本林業調査会）、豊田和弘（山と溪谷社）、中西実（共同通信）、降矢輝彦（林野弘済会）、水野一夫（木文社）、若松舜児（中津木材相互市場）、吉藤敬（広報センターA&F）。

研究会報告

本年度の研究会は、5月16日「フィトンチッドの働き」(谷田貝光克氏・森林総合研究所生物活性物質研究室長)、6月16日「環境汚染と森林」(森川靖氏・森林総合研究所環境整理研究室長)、地球環境としての熱帯林「林久晴氏・林野庁海外協力室長)をこれまでにおこなった。それらの概要を報告する。

フィトンチッドの働き

森には様々な臭いがある。草木の葉や花から発散される香りは穏やかで気分を落ち着かせる。そのほとんどは精油で主成分はテルペン類。これは炭素原子五個からなるイソプレンが植物体内でいくつか結合したものを総称した言葉で、揮発性が高く特有のにおいを発するものが多い。スギ、ヒノキなどの葉から得られる精油には五十から百種類程のテルペン類が含まれているが、樹種により含まれるテルペン類と含有量がかなり異なる。

葉などに含まれる精油は、そのまますべて大気中に放出されるわけではなく、ごく一部が放出されるが精油含量の大きい樹木は放出量も大きいと考えられる。スギで実験した結果ではヘクタール当たり一昼夜に、250mlの缶ジュース約九本から八本分の精油が放出される計算になった。このように大量に放出される精油の成分であるテルペン類は、大気中に放出されるとたちまち拡散され、十億分の一程度の濃度になってしまうが、この希薄な状態のときの森の香りは人間にとってかろうじてにおう程度のもの。マウスを使った実験では、テルペン類の濃度は森林内の濃度が最も快適であり、濃度が濃すぎると逆にストレスがたまることが分かっている。最近では森の香りを基調にした芳香剤が目につくが、香りが濃ければ良いというものではない。

フィトンチッドの範囲は広い。これらの抽出物から有用成分を取り出し、用途を開発することが限られた天然資源の有効利用の点で重要である。

環境汚染と森林

森林には環境保全機能があるといわれて来た。光合成生産は、二酸化炭素を吸収して酸素を出す機能が植物にあるからだ。いま地球規模で問題にされているのは、光合成生産を担っている森林の二酸化炭素の吸収力が小さくなっていること、つまり森林面積の減少だ。化石燃料を燃やし続けることによって、炭酸ガスが増えている。森林はこれまで二酸化炭素の吸収側であったが、現在では放出側ではないか。ということは熱帯、亜熱帯地域で森林が伐採され焼かれることで、せっかく蓄積した炭素を炭酸ガスの形で放出している。これが地球レベルでの森林の問題になっている。

大気汚染の元は二酸化硫黄、二酸化窒素、オキシダント。二酸化硫黄は公害規制で減ってきているが、これを明治神宮の森で調べると、樹冠部は濃度が高く下にくるほど濃度が低い。オキシダント

トも森の中では低くなる。このようなデータから、森林の衰退がはっきりしない場合、森林は空気の浄化作用があるとの結論になると思うが、果たして浄化なのかどうか分からない。

森林を扱う側としては、生活と森林をどう考えるかにあるわけだから、都市林に汚染ガスに強い木を植えれば、われわれは環境に鈍感になると思う。逆に、汚染ガスに弱い木を植えることによって環境の指標にすべきではなかろうか。樹木に大気汚染の浄化機能があることを過大に考えるほど、汚染に強い木を植えたいくなるが、われわれは環境に対してアセスメントをしていくことが一つの仕事。森林によって大気を浄化する技術の開発は非常にむづかしい。やはり大事なことは、環境アセスメントではないかと考える。

地球環境としての熱帯林

熱帯林で問題なのはその砂漠化。現在乾燥地域、半乾燥地域の農地で砂漠化しているのは六百万haあると言われている。その原因として過放牧と過耕作が大きいようだ。人口増加で食糧不足が生じる。そのため森林を伐開して焼畑移動耕作で農地を拡大し、過放牧、過耕作により農地の生産力が低下する、それが放置され砂漠化していく。

熱帯林は、北回帰線と南回帰線の間で挟まれた熱帯地域に分布する森林で、約19億haで地球の全森林面積の約半分を占めている。このうち閉鎖林が12億ha、疎林が7億haで、東南アジアでは9割が閉鎖林、アフリカは疎林が多い。これら熱帯林が毎年北海道と九州を合わせた面積に匹敵する1,130万haが減少していると言われている。これを地域別に見ると熱帯アメリカが約560万ha、アジア200万ha、残りがアフリカということになる。

熱帯林減少の原因は基本的には人口の増加にあるが、過放牧、過耕作とともに薪炭材の伐採が大きい。商業伐採で日本が非難されているが、これは択伐で一定の基準内の伐採で、森林の劣化にはつながるが、直接的な減少にはならない。ただ、伐採のための道路を利用して農民が入り焼畑にするケースがあり、間接的に減少につながる。

熱帯林では、マングローブが問題になっている。これは、世界で150万haと少ないが、1973年から78年の5年間に面積が56%に低下した。減少の主な原因は農地への転換、エビの養殖のための伐採、海岸及び内陸の開発の影響である。また木炭の生産もある。備長炭のような良質の木炭ができるので、そのための伐採も見逃せない。

我国は、これら熱帯林に対する技術協力を積極的に進めている。造林をはじめ木材の高度利用まで、専門家の派遣、研修生の受け入れ、機材の供与などだが、熱帯3地帯の11カ国で13のプロジェクトを実施中であり、すでに5カ国、6プロジェクトを終了している。専門家派遣は現在70名、内林野庁から技術の優れた国有林職員など35名、森林総合研究所から11名となっている。また、研修生は集団、個別合わせて100名受け入れている。

高木文雄と語る山の哲学

林業界はどうも世間狭いが、それでも知己がいる。大蔵省事務次官、国鉄総裁を歴任され、いま「森とむらの会」の会長をしておられる高木さんだ。森林経営に当たって相続税など林業税制が大きな問題となっている時、主税局長をつとめた高木氏の協力は是非とも必要となってきた。

この本はその高木さんが林業に関係する12人の人達との対談集である。林業の不振から、ともすれば暗くなりがちだが、これらの人達は苦しい中で21世紀の森林づくりをめざして頑張っておられる。その情熱がひしひしと伝わってくる。

本づくりに協力された森巖夫さんが後書きで「森林の公共財的性格のみに目を奪われ、森林が私的に所有され経済的営みの対象になっていることを見失うとすれば片手落ちの森林観になってしまう」といっておられ、この本はその蒙をひらいてくれる。林政ジャーナリストの会が共同取材した山県農場の山県睦子さんとの対談も含まれている。(大谷健)

(清文社、251ページ、税込み1500円)

計 報

日本林政ジャーナリストの会幹事として活躍してこられた、元産経新聞論説委員、馬淵良俊氏は、かねて病氣加療を続けていましたが薬石効なく、7月24日午後6時19分逝去されました。58歳。謹んでご冥福を祈ります。

葬儀は7月26日午後1時から多摩市永山の自宅近くの集会所に、関係者多数参列してしめやかに執り行われました。

馬淵氏は、昭和29年4月産経新聞社入社。秋田支局、経済部を経て46年8月、ボン支局長。53年4月から62年12月まで論説委員をつとめた。著書に「裸の西ドイツ経済」などがある。

==== 会 員 紹 介 =====

次の2名がこのほど新しく入会されました。

大塚恵一氏 朝日新聞社、農政クラブ担当。大谷健副会長の紹介。

三森利昭氏 森林総合研究所。故馬淵良俊氏の娘婿。故人の遺志を継いで入会。

お詫びと訂正

林政ジャーナリストの会名簿4ページ、高田通夫氏の所属が「毎日新聞論説委員」となっていますが、「読売新聞論説委員」の誤りです。誠に申し訳なく謹んでお詫びし、訂正致します。